



書評

《シリーズ・高次脳機能の教室》

失行の診かた

河村 満 シリーズ編集

近藤 正樹 著

わかりやすさと体系的な理解の「絶妙な按配」

【評者】 中川 賀嗣 北海道医療大教授・リハビリテーション科学

本書は高次脳機能障害に携わり始めて間もない方々が、失行を基礎から学び、理解することをめざした書である。失行の概念、症状は難解であり、そのため読者にとって説明が詳しすぎると整理しづらいものとなり、逆に簡潔すぎると言葉足らずで、文脈を理論的に追跡できなくなる可能性がある。本書は平易さを保ちながらも、体系的に理解できる説明がなされているため、絶妙な按配の入門書というのが私の印象である。

失行を理解するには、「運動機構」(ボトムアップ的な理解)とその「制御方法」(トップダウン的な理解)の両方の理解が求められるが、本書は、この2つをわかりやすく解説し、

網羅してくれている。特に図を豊富に用い、コラム(補足説明)を活用することで、用語や概念の難しさを解消している。本書のわかりやすさ、面白さは各章の見出しからも垣間見ることができる。例えば第1章は「どうして、失行は難しいのか—『動き』と『道具』を手がかりに」である。こうしたわかりやすい表現、魅惑的な表現での解説が、「運動・感覚を支える生理学的知見」「古典的失行論から現在までの主な失行論」「評価の実践的な方法」「リハビリテーションの意義」についてなされている。

また本書は、最近の研究も考慮している。例えば失行型の一つに道具の使用動作が障害されるタイプがあることは以前より

知られていたが、その使用動作の可否を評価する課題内容の違いには、ほとんど注目されていなかった。それが最近では、道具を手にはせずパントマイムで再現させるのか、手にして再現させるのか、あるいは道具の使用対象も視覚提示しているのかなど、具体的に条件を規定して成否を評価するようになっている。それは同じ使用動作でも、これらの条件が異なることが、動作の成否に影響することが知られるようになったためである。

本書はこうした最近の失行研究の動向をも踏まえた、失行の本質にも迫る書といえる。

A5判・頁200 2025年11月
定価：3,850円(本体3,500円+税10%)
[ISBN978-4-260-06272-5] 医学書院刊

